

住む人・使う人が主人公！

私たちは住む人・使う人の
立場に立って設計しています。
お気軽にご相談下さい。

京都建築事務所

〒 604-8083

京都市中京区三条柳馬場東入中之町10

代表取締役社長 川下 晃正

TEL (075) 211-7277

FAX (075) 211-7270

<http://www.kyoto-archi.co.jp/>

第7回釜ヶ崎のまち短期留学 開催します！

日時:4月 18 日(土)10時～16時ごろ

参加費:4,000円(昼食代込)

- 水野阿修羅さんによるフィールドワーク
- おはなし 釜ヶ崎での若者支援の現状

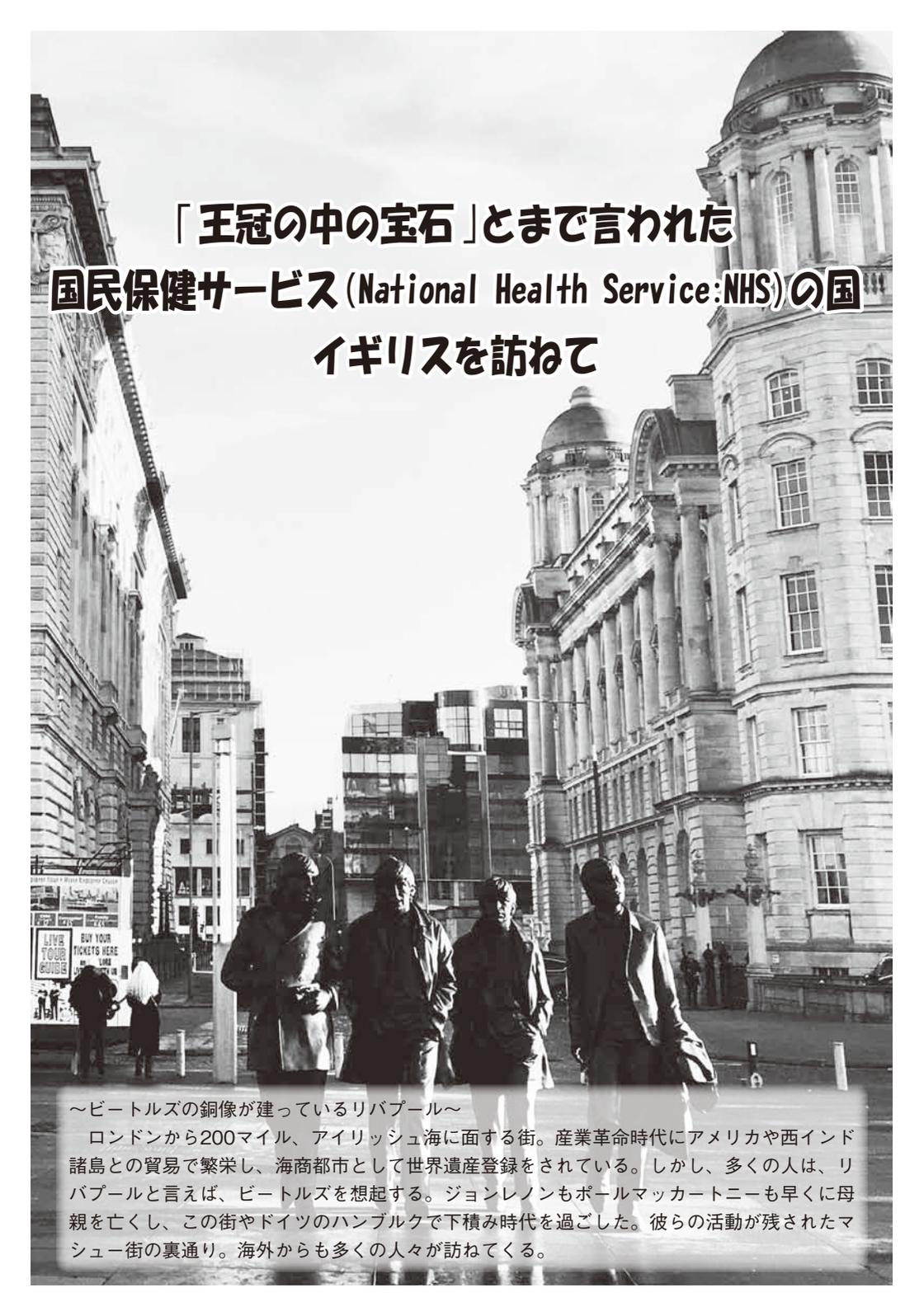
小林大悟さん(NPO法人釜ヶ崎支援機構)

笠井亜美さん(NPO法人Homedoor)ほか

問合せ・申込みは下記まで。HPからもお申込みいただけます！

総合社会福祉研究所 TEL06-6779-4894 FAX06-6779-4895

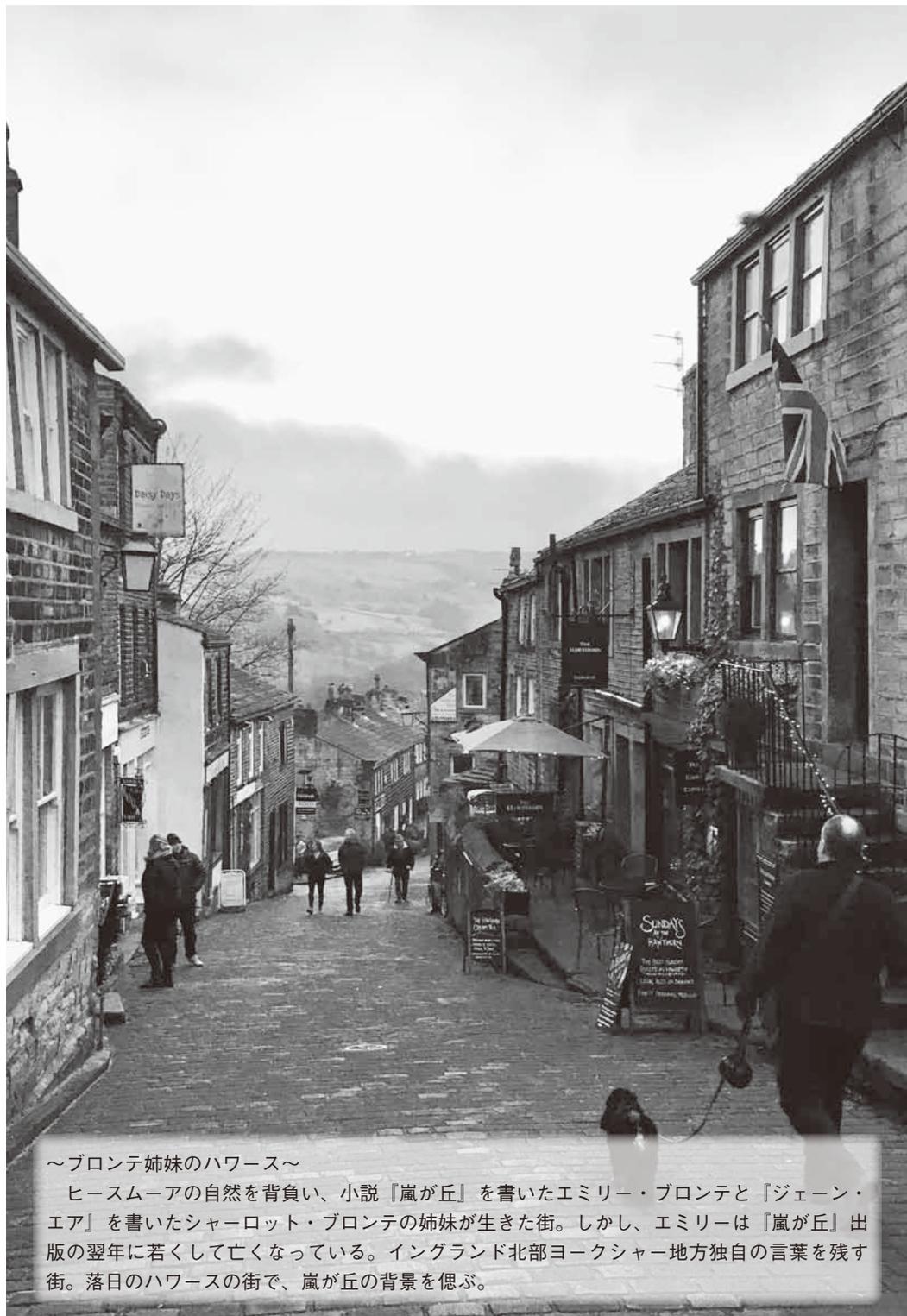
<http://www.sosyaken.jp/> E-mail:mail@sosyaken.jp



「王冠の中の宝石」とまで言われた 国民保健サービス (National Health Service: NHS) の国 イギリスを訪ねて

～ビートルズの銅像が建っているリバプール～

ロンドンから200マイル、アイリッシュ海に面する街。産業革命時代にアメリカや西インド諸島との貿易で繁栄し、海商都市として世界遺産登録をされている。しかし、多くの人は、リバプールと言えば、ビートルズを想起する。ジョンレノンもポールマッカートニーも早くに母親を亡くし、この街やドイツのハンブルクで下積み時代を過ごした。彼らの活動が残されたマシュー街の裏通り。海外からも多くの人々が訪ねてくる。



～ブロンテ姉妹のハワース～

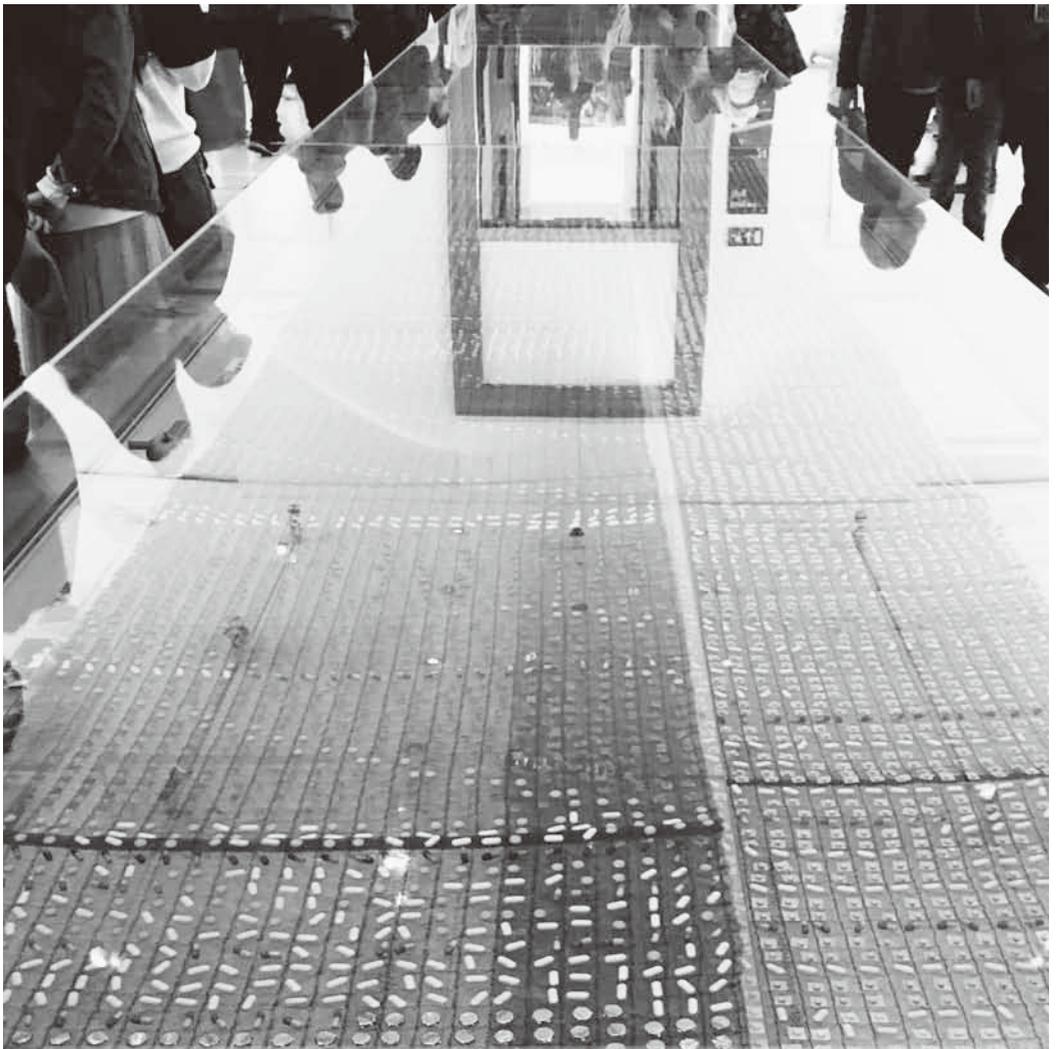
ヒースムアの自然を背負い、小説『嵐が丘』を書いたエミリー・ブロンテと『ジェーン・エア』を書いたシャーロット・ブロンテの姉妹が生きた街。しかし、エミリーは『嵐が丘』出版の翌年に若くして亡くなっている。イングランド北部ヨークシャー地方独自の言葉を残す街。落日のハワースの街で、嵐が丘の背景を偲ぶ。



～イングランドで最も美しい村 バイブリー～

10年程前、京都美山の地で研究会が開催されたときに、廣末利弥さん（故人）から、「茅葺屋根は実は貧困の象徴だった」と教えられた。バイブリーのアーリントン・ロウという建物はライムストーンで壁が作られ、スレート屋根。14世紀終わりに、修道士が羊毛の貯蔵庫として建て、17世紀ごろにはウール職工らのために改修されたという。

「モダンデザインの父」と呼ばれるウィリアム・モリスが、産業革命期に手仕事の大切さを説いていたことも、「最も美しい村」という表現のなかに込められているのだろうか？



～大英帝国博物館のエントランスには、人が一生に飲む薬が陳列されている～

イギリスの国民保健サービス（NHS）の制度ができて72年が経とうとしている。1942年11月にベヴァリッジ報告が公表され、戦後、労働党政権は、財政難解決と福祉国家建設が願われた政権として出発する。ベヴァリッジは、5つの巨悪（窮乏、病気、無知、不潔、怠惰）の解決のために、社会保険を普遍的に継続することを提示する。

この国民と外国人居住者が無償で医療を受けられる制度は、サッチャー政権をはじめ、さまざまな改革という名の規制と制限が加えられてきた。いまや民間保険に加入して自由診療を選択する経済力のある人々も少なくない。大企業では福利厚生の一環として自由診療の医療費負担をおこなっているところもある。

アメリカ合衆国の民主党大統領候補選でも問われつづけている、国民皆保険制度。日本における皆保険制度への攻撃と規制抑制の時代。95年勧告の自助共助の国家宣言は、ますます国民実態とかけ離れていることを思い浮かべながら、その学びとたたかひを知る。

(写真・文 下野祇園)

●特集● やっぱり福祉が好きだから

大谷大学 学生さんの座談会

太田友崇さん／神田恵さん／下飼凌太さん／川北楓子さん	10
あたらしく福祉・保育の現場に来られたみなさん、ようこそ！	
	兼田 歩 28
子どもと父母と、自分自身と向き合って	大林 恵実 30
あたらしい自分と出会う福祉のしごと	中村 佳裕 32
なかまも家族も職員も、その人らしく	中野喜代子 34
人として大きく成長できる介護のしごと	加藤 伸 36
社会人1年生のホンネ	山崎 優菜 38
人材の定着が確保につながる	申 佳弥 40
第13回京都社会福祉講座が終了しました	宮本 武史 43

●トピックス●

ろう重複高齢者にとっての介護保険制度の改善点	
全国高齢聴覚障害者福祉施設協議会作業部会	44
「津久井やまゆり園事件」で、知的障害のある子の親として思うこと	
	播本 裕子 52
感染症の流行 いのちをあずかる社会福祉現場の苦悩	塩見 一弥 56

●連載●

阿修羅がゆく わたしが好きな釜ヶ崎(9)	水野阿修羅 62
相談室の窓から	
保育士研修会をとおして感じた保育士さんの熱意	青木 道忠 64
育つ風景	
保育園の年長組はつらいよ	清水 玲子 66
ひととしてあたりまえに生きたい	
大阪聴力障害者協会会長として(2)	清田 廣 68
映画案内 『羊と鋼の森』	吉村 英夫 70
現代の貧困を訪ねて	
野宿者襲撃と学校での授業	生田 武志 72
似らすとれーしょん道場 似顔絵まんがアート	
デフォルメさせていただきます！	ラッキー植松 74
ホームレスから日本をみれば	ありむら潜 76
花咲け！ 男やもめ	川口モトコ 77

●表紙の絵●
神門やす子



みんなのポスト 60 / 福祉の動き 78 / 今月の本棚 81

●グラビア●

「王冠の中の宝石」とまで言われた
国民健康サービス (National Health Service:NHS) の国
イギリスを訪ねて

先行研究を学び、感謝しつつ継承・発展させる

大阪ソーシャルワーカー協会理事 阪倉 恵さん

私が高校生のころ、父は食糧品店を閉めて障がい者の授産所を運営し、老人ホーム設立を志していました。私はオペラ歌手への道を断念して、一九七一年四月に立命館大学二部法学部へ進学しました。

当時、大阪の釜ヶ崎では、小柳伸顕のぶあきさんが「あいりん小中学校」第四代スクールソーシャルワーカーとして活動していました。運動場のある新校舎設立が七〇年メーデーの要求となり、「憲法を暮らしに生かす」黒田革新府政のもとで実現しました。京都の蜷川府政は住民運動を尊重しました。社会党は「敵の味方は敵・敵の敵は味方」と要求で共産党と共闘し、全国統一戦線の実現は政治の動きと国民の要求運動を連動させました。労働運動と平和運動は一体となり、春闘とベトナム人民支援は不可分でした。

七〇年代の夜明けに「働き、かつ、学ぶ」生き方は誇りでした。電電公社（日本電信電話公社）に入社して、組合の一党支持献金や部落民以外は差別者だという主張への批判に対して、「名前を貼り出すか」という脅しや「ゴキブリが出た」とピラを撒かれても、憲法 の 思想信条の自由、個人の尊重・幸福追求権、平等権は、私に確信を与えてくれました。

しかし、一九九四年に佛教大学大学院社会学専攻で児島美都子みつこさん（日本福祉大学名誉教授）に出会い、「人間裁判（朝日訴訟）」から第二五条生存権が人権問題の大前提であることに気づきました。以後、大学や専門学校等の社会学の講義では必ず「人間裁判」を観てもらい、社会福祉や社会保障、生活支援の基本的な考え方の手掛かりを提供してきました。



さかくら めぐみ

大阪SW協会理事。社会福祉士・精神保健福祉士。昭和50年立命館大学二部法学部卒。電電公社に勤務し通信で養護学校等教員免許を取得。退職後、高木俊一郎教育相談室相談員、白神啓子コミュニティレク・助手を経て、佛教大学通信社会福祉学科卒、博士課程満期退学。社会福祉実践の価値、方法論を研究。大学・専門学校等非常勤講師を経て東大阪短大教授。嘱託にて総合健康推進財団、大阪府社協社会貢献推進室、大阪市社協休日夜間相談、福祉事務所、大阪府精神障害者相談員等勤務。

私は、短大に勤務する前に、大阪府社会福祉協議会の社会貢献支援員本部として全体会議やブロック会議企画、研修企画や資料の作成等をしていました。専門分野の研修や新人研修の講師、事例検討のSV（スーパバイザー）として総合社会福祉研究所の多くの会員に協力していただきました。全国に先駆けた府社協の社会貢献事業の成功に、本研究所が大きく寄与したことを報告しておきます。

現役を退いたいまも、国際学生連盟の「労働に打ち鍛えて実らせよ学問を、平和望む人のためにささげよう我が科学」という歌が心に響きます。いまでできることの一つに、地域生活の可能性を探る課題があります。

今日、高齢者問題とその解決に介護保険制度の検討が主流ですが、介護保険によらない高齢者の生活課題も多く、対応の一つに「高齢者養護委託制度」（老人福祉法第十一条、生活保護法第十九条関連）があります。この制度は、養護者がいないか、あっても不十分な場合に市町村長が養護受託者に委託するものです。残念ながら周知は皆無ですが、地域福祉をはじめ、今後の社会福祉のあり方に貴重な示唆を与えてくれるでしょう。榎本和子さんが、論文「我が国における老人養護委託制度について」（『追手門学院大学文学部紀要』、通号19、一九八五年）で、住民主体の参加・協同的体制による地域福祉活動として、あたらしい老人養護委託制度の可能性に言及しておられることに学び、「同居のすすめ」を推進したいと思います。

社会福祉の実現は、歴史や先達の研究に学ぶことも重要です。学ぶとは感謝をこめて引き継ぐこと。引き継ぎ、発展させるために、研究所の今後の活動に期待しています。

福祉の仕事の魅力と奥深さを伝えるために

私が大学受験をしたのは、二〇〇五年です。これといってめざしていた職業もなく、なんとなく人の役に立つ仕事ができたらいいかなと思いい、福祉学部を選択しました。いまでは、学生のあいだに企業で職業体験をする「インターシップ」が一般的になり、大学の約七〇％が単位認定もしていますが、当時はインターシップという制度はあったものの、参加するのは学生の一部で、「キャリア教育」ということばもいまだ定着していませんでした。大学は学びの場なのか、就職のための場なのか、ちょうど過渡期にあったように思います。

大学三回生の秋頃から就職活動がはじまりました。私は大学院に進学することを決めましたが、就職氷河期以降、有効求人倍率が少し上向きになっていたところで、まわりでは、二〜三社は内定をもらっている学生が多かったと思います。

二〇〇八年九月、みんな就職先も決まり、あとは卒業するだけだというところに、リーマン・ショックが起きました。年が明けると、就職予定だった企業から内定を取り消されたという学生が出てきて、全国的にもリーマン・ショックによる「内定取り消し」が社会問題になりました。もうすぐ授業もおわり、あとは入社



式まで最後の学生生活を満喫するだけだと思っていたのに、続々と出てくる内定取り消しと先の見えない経済悪化に、学生も大学側もパニックしかありませんでした。内定取り消しに遭い、わざと卒業論文を出さずに「就職浪人」する学生もいました。

しかし、私のように大学院に進学したり就職浪人をして、リーマン・ショック後の数年は、一〇〇社受けて一社も内定がもらえない、という状況があたりまえになりました。インターンシップ、OB・OG訪問、企業研究など、少しでも周りの学生より一歩前に出るために、勉強はそっちのけで就職活動にはげまなければならなくなりました。

今回、大谷大学の学生さんのお話をうかがいながら、自分が学生だった一二年前を思い返していました。福祉の仕事を選ぶ人たちのなかには、自身の生活体験から「福祉の仕事に就きたい」と決めて進学する学生が一定数いると思います。いっぽうで、私もそうでしたが、将来どんな仕事をしたいか、自分がなにに向いているのか、大学進学時にはまだはつきりと決められない学生もたくさんいると思います。そうした学生が、大学で福祉を学ぶなかで「福祉っておもしろい」と感じたり、学びのなかでいまの社会のあり方に疑問を感じたり、自身の生活とのつながりに目を向けられるようになることは、とても貴重なことです。人が社会のなかで生きていくうえで社会福祉は切り離せないものだということを、実感するのだと思います。

新入職員を迎える福祉現場は、学生さんたちの「福祉っておもしろい」という思いをもっと広げ、深め、なかまと共にできる職場でなければならないのだと思います。

(編集主任)